

JELA NEWS

ジェラ ニュース 第17号 2008年11月15日発行 発行責任者 古川文江

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援/アジア子ども支援/ブラジル子ども支援/ボランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座/奨学金制度/宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節



米国のグループワークキャンプに6名が参加!

夏に全米各地で実施されている「グループ・ワークキャンプ」(主催:米国のグループ・ワークキャンプス財団)に、JELCむさしの、名古屋めぐみ、大岡山、蒲田、田園調布の各教会その他から6名の青少年を派遣しました。4ページ以下にレポート(編集版)と来年参加予定の米国キャンプに関する情報を掲載しています。

[この号にはこんな記事が] なぜブラジルの子どもを支援するのか(古川文江)……2 JELA歴史コラム3「急がば回れ」(長尾博吉)……2 求めていたものとの必然的な出会い(呉ふみえ)……3 グループワークキャンプ・レポート……4 中東地域の学びの機会をいただいて(沖田由佳子)……6 アジア学院研修生交流会(鳴海 亮)など……7 お知らせ……8

なぜブラジルの子どもを支援するのか

JELA事務局長 古川文江

JELAがブラジルの子ども支援を開始してから9年余になりました。JELAはなぜブラジルの子どもを支援するのでしょうか。きっかけは、ルーテル教会員による信徒運動「ストリート・チルドレンを支える会」でした。

ブラジルのファヴェーラ

1995年8月、JELCのブラジル伝道30周年を記念する訪伯団が結成され、日本から27名がサンパウロ教会の記念礼拝に参加しました。限られた旅程の中で、一行は現地の方々との交わりとブラジルの広大な自然を楽しみ、そして旅も終わりに差し掛かるときに訪れたのが、サンパウロ郊外のファヴェーラにある子どもの施設でした。それまで目していたブラジルの美しい一面とは打って変わったファヴェーラの現状に一行は大きな衝撃を受け、施設の働きに多くの感銘を受けました。

ファヴェーラとは、ブラジル東北部の過酷な生活から逃れてきた人々が、都会の中の空き地を不法占拠して作り上げた居住区のことを言います。貧しく不衛生なだけでなく、暴力団の脅威が充満する極めて危険な地域とも受け止められています。ファヴェーラの貧しい家庭に、アルコール、麻薬、暴力が蔓延していることは想像に難くありません。家に居場所が無い子どもたちが行き着く場所は路上であり、ひとたび路上生活を始めてしまうと、ひたくりや強盗、更には麻薬や売春へと誘われるのは自明のことです。事実、世の中から不必要な存在とされた多くの子どもたちが、警察や「死の部隊」によって射殺されてきました。

支援活動の経緯

ブラジルの軍事政権が終息し、教会内に解放の神学が広まる1980年代になると、子どもたちを守るためにファヴェーラの近隣に子どもの施設が建設されるようになりました。ブラジルの信徒が1年間に10ドルの献金でこれらの施設を支援していることを見聞きした訪伯団一行は、初回のブラジル宣教師であった藤井浩先生の呼びかけにより1996年1月に「ストリート・チルドレンを支える会」を結成し、支援活動を開始しました。27名から始まったこの意義ある信徒運動を

その後JELAが引き継ぐことになり、当初の10倍を超える賛同者が与えられ、さらに支援先をサンパウロからポルトアレグレ、リオデジャネイロと拡大し、今日に至っているのです。

ファヴェーラの女兒の例

ここにJELAが支援する保育所に通う3歳の女兒のケースをご紹介します。女兒は、母親と生まれたばかりの弟と父方の祖父母と共にファヴェーラの2部屋しかない小屋に住んでいます。この家には最低限の下水設備もなく不衛生きわまりません。6歳になる女兒の兄はブラジル東北部に住む母方の祖母と暮らしており、女兒の父親は拳銃強盗の罪で服役中です。一家の所得は、祖父のR\$390(約25,000円)の月給のみ。生活は常

に極度の困窮状態です。

再びなぜ支援するのか

このような背景にあるファヴェーラの子どもたちの状況をご想像くだされば、無料の保育所や子どもの施設の重要性と必要性は容易にご理解いただけるでしょう。そこでは、栄養バランスの良い食事、衛生的な世話、医療や歯科の提供に加え、基礎的な学習、情操教育、職業技術指導など、子どもたちの社会性と創造性を育み、その将来を守るプログラムを用意して子どもたちを保護しています。JELAは皆様のご理解とご支援を得て、ブラジルのみならず、インドやアジア各地で出会う子どもたちのそれぞれの子ども時代を守るために、皆様と子どもたちとの間の架け橋になりたいと願っています。



求めていたものとの必然的な出逢い

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座2期生 呉ふみえ

「リラ・プレカリア」のプログラムを受講して、もうすぐ8ヶ月になろうとしている。2月のハーブ演奏準備コースを皮切りに、4月から本格的にプログラムが始まり、毎週木曜の朝のこころの時間では、体操からはじまり、瞑想、詩篇の学び、ミュージックジャーナル(テゼ、グレゴリオ聖歌)など多くの学びに取り組んでいる。午後は、声楽とハーブのレッスンが個々にあり、ときにはアンサンブルの練習もグループです。なにしろあつという間の8ヶ月だったように思う。わたしはがん患者さんの支援活動をしながら、祈りと瞑想は自然にできるようになっていたが、それ以外の、今回のリラ・プレカリアのプログラムで触れる詩篇の学び、ハーブと声楽は初めての経験であるので、本当に大変である。大変なのだが、とっても楽しいものでもある。ときにとても苦しいこともあるのだが…。

毎日自宅で、こころの時間、ハーブ、声楽に三時間取り組むことが約束となっている。子どものころ3年ほど友人たちと楽しく教会に通った経験があるが、詩篇は初めてである。詩篇は嘆きの詩篇ともよばれているそうだが、確かにそのように思う。150篇ある詩

篇のうち、第23篇はだれもがこころを奪われる一篇と言われる通り、“希望を感じることが出来る。詩篇23に触れてみてこころに留まったのは、「神と何かをすることは、自分一人ですることよりもずっと容易である。なぜなら私たちは、自分に約束するよりも神に対してはずっと真剣に堅い約束をするからだ」ということである。わたしはまだ神様と約束をしたことはないが、これから自分の意志の弱さに挫けそうになったとき、あるいは大きな困難が降りかかったとき、この“約束の意味を覚えておこう。

毎日祈り、瞑想をし、いつでもどこでもテゼとグレゴリオ聖歌を口ずさみ、ハーブの練習に明け暮れる。祈りと瞑想はわたしのこころ



の深いところから落ち着かせ、気づきを与えてくれる。テゼとグレゴリオ聖歌の歌とそしてそれをハーブで奏するとき、至福を感じる。わたし自身が魂から癒されるのを感じる。このリラの学びを肉体的な病い、こころの、そしてスピリチュアルな痛みの中にいる多くの人々のために実践できるように真剣に取り組んでいきたいと思う。

病いに苦しみ、そしてこころとスピリチュアルな痛みにも苦しむ人々の支えになりたいと、こころとからだ、そしてたましいにも働きかけるカウンセリングやボディワークを試みてきた。しかし死が近くなった方々の最期に寄り添えるものが何かまだ足りない、欠けているように思った。そんな時出逢ったのが、リラ・プレカリア(祈りのたて琴)であった。偶然ではなく必然だったと思う。出逢うべきものには出逢うべくして出逢うと思う。出逢えたことに感謝しつつ……。



JELA歴史コラム その3

「急がば、回れ」



JELA常務理事
長尾博吉

1908年9月、現在のルーテル学院大学及び九州学院高等学校の前身であります「熊本高等予備校」が開校されました。これによって、我が国におけるルーテル教会の教育事業への熱意が米国教会に対し実証され、正式にアメリカ合衆国南部一致福音ルーテル教会総会議において、かねてより要望のあった日本における神学教育機関及び高等教育機関の設置が承認され、1911年4月15日、米国教会よりの支援金によって九州学院は土地建物を取得し、開学の輝かしい日を迎えたのでした。

思い返せば、日本のルーテル教会の最初の宣教師Schererは、当初は友人のBradburyの招きを受け、彼の後任者として公立の佐賀中学校の英語教師となりました。彼が公立佐賀中学校の英語教師となったのは、一つには自らの生活の糧を得るためであり、今一つは英語を通しての日本人青年への福音宣教と人格教育の機会を得るためでした。しかし、これが、やがてルーテル教会の伝統、宣教の一方策となって行きました。それは、キリストの福音を直接一般日本人に伝えることも然ることながら、教育や、社会福祉活動を通して間接的にキリストの福音をその周囲にある関係邦人に伝えると云うことです。

その結果、第二次世界大戦前は、九州学院、九州女学院、日本ルーテル神学校、東京老人ホーム、慈愛園等が東京と熊本に開設されました。また大戦後は、東京以西の各地に、幼稚園、保育園、児童養護施設等が、日本福音ルーテル社団を通して次々に開設され、それと平行して、福音宣教の地盤も拡大

されて行きました。

ところが、第二次大戦が勃発し、キリスト教は敵性宗教として社会の指弾を浴び、外国人宣教師は母国に追放され、又残された、直接宣教の使命を帯びていた邦人教会も弾圧を受け、その資産は戦火により多くを失い、壊滅的な損害を被りました。しかし、福音の間接宣教の器であった教育事業及び福祉事業は、戦後にその活動を引き継がれ、その働きは社会に評価され、今日の更なる発展を見ました。戦後の教会は、比較的被害の少なかったこの教育事業及び福祉事業と協力して宣教の回復を図れたのです。正に急がば回れです。

それは、当初の教育、福祉を通しての間接宣教の方針に誤りがなかった事の証明であり、その方針は、変わることなく伝統として日本福音ルーテル社団に今日も受け継がれています。そして、それは、日本福音ルーテル社団の形態が如何に変わろうとも、将来とも変わりなく受け継がれて行くものと存じます。

グループ・ワークキャンプ2008 参加者レポート



●自己中からの脱却

(森奈生美/JELCむさしの教会・16歳)

「誰か、もしくは何かのためにどんなリスク(危険)を背負ったことがあったか?」を考える機会が与えられました。他の人たちの話を聞いて、なるほどって感心しました。優しい上に強くて、決断力や責任感があつて、みんなすごいなと思いました。そして、いつも私を楽しませて励ましてくれる周りの人や家族のことを思い出しました。何ひとつ返せていないのに、愛も時間もお金も私のために使ってくれている。かけられたという話を小さな頃から当たり前のよう何回も聞いていたけど、それは私が知っている一番大きなリスクだと改めてふと思って、寝ました。毎日の学びのテーマは私にとって、一日でかみ締めるにはとても大きすぎたけど、これから

の道に大きなものを与えてくれました。自己中で「楽しいだけ」の自分から卒業したい、キャンプ中のワーク(奉仕作業)や人の心との出会いを通して、また今までの人生を通して受けて知ってきた神様の愛を、リスクと勇

気と愛とかと共に、後悔しないうちに、行動をもって外に向けて自然に広げていけるになりたいです。

●できることを一生懸命に

(神崎いずみ/JELC名古屋めぐみ教会・17歳)

英語が一番の大きな壁でした。簡単な文法でゆっくり話してくれているのに全然聞き取れないし、いつも同じ答え方しかできないし、コミュニケーションがうまくとれなくて、学校で勉強していることもほとんど役に立たなくて自信を無くしました。私は、「言葉が分からない私にもできる作業を頑張ろう!」と思いました。私はたまたま釘打ちが得意で、メンバーにもほめられました。「これだ!」と思い、それからはひたすら釘打ちばかりし、クルー(奉仕作業の仲間)のメンバーとコミュニケーションがとれるようになってきて、デジカメの写真を見せ合ったり、電子辞書を片手に一生懸命会話してみたりして、それで会話が通じあえた時の喜びが大きくて、相手も喜んでくれて、本当に嬉しかったです。あつという間にキャンプの終わりがきて、最後の作業の日、同じクルーのメンバーの一人が「私達の教会ではクルーのメンバーの中で一番LOVE OUT LOUDした人にこのネックレスをあげるになっているの」と言って、手作りの十字架のネックレスを私にくれました。それを見た時、何も分からなくてこんなにみんなに迷惑ばかりかけてた私でもLOVE OUT LOUDすることができたんだなって、うれしくてたまりませんでした。



●愛を持って接する

(関口美香/JELC大岡山教会・16歳)

私のクルーはスロープを作ったのですが、スロープなんて作った事ないし、最初何をすればいいかわからず、英語が話せないから何も聞けずに、ただ突っ立って皆の作業を見ていただけでした。けれど自分から何か簡単な事でも行動を起こしていけば、皆が少しずつ話しかけてきてくれたり、簡単な作業をやらせたりしてくれるようになりました。言葉がわからなくても作業をしていくうちになんとなく何をすべきなのかわかったり、何度も耳にする単語が何を指しているのかわかってきたりして、日々作業に溶け込んでいけて楽しかったです。軍手とゴーグルなどを持ってきていなかった私に、ドンナさんが貸してくれました。彼女は二人の娘を持つ母親なのですが、初対面の私に最初から自分の娘のように接してくれました。英語が聞き取れない私にゆっくり簡単に説明してくれたり、一人で立っていると話しかけてくれたり、お母さんのようでした。最終日にゴーグルを返そうとしたら

「来年のためにとっておきなさい」と言われて嬉しかったし、最後まで娘のように接してくれた彼女のように私も、全然知らない他人でも愛を持って接してあげられるような人になりたいと思いました。



Love Out Loud

愛を行動で示す

●自分と真正面から向き合う (山本真央/JELC蒲田教会・15歳)

自分の兄が麻薬関係で殺された、最初は本当に許せなかったけど、今はもうそんなに犯人のことを怒ってない、とクルーの一人が話してくれました。いつも明るく振舞っていて優しくて、どこかで会うたびに私に声をかけてくれた彼が悲しい過去を背負っていると分かり、本当にショックでした。他にも「許す」というテーマでみんな話をしてくれて、みんなで泣きました。夜のプログラムで一人になって考えてみたら、自分は許されること、愛されることに慣れてしまっていた、いつも受身で、ごめんねとか遊ぼうとか言われるのを待っていた、と思っている自分に気がつきました。人を傷つけるようなことを平気で言ってきた自分を神様は許してくれるんだろうか、頭で分かっているでもそれが直らない自分が許せませんでした。お祈りしていたら神様が、人を許すためにまず自分自身を許さないとけない、自分を許し、愛し、そしてすすんで人を愛しなさい、と言ってくださいました。その言葉で私は自分と真正面から向き合うことができました。たくさんの人が隣に座ってくれました。抱きしめてくれる人、話を聞いてくれる友達がいきました。何より、神様がそばにいてくださったことに心から感謝しました。



●言葉を越えた気持の共有 (石川理恵/JELC田園調布教会・16歳)

ホームステイ先に行ってみると、みんな英語で喋っていて全くわかりませんでした。しかも自分が思っている以上に英語を喋ることが難しく、最初はとても憂鬱でした。しかし、現地の人はとても優しく、わたしのしゃべる滅茶苦茶な英語も一生懸命聞こうとしてくれて、話すときも分かりやすいようにゆっくり簡単な単語を使って話してくれたので、とてもうれしかったです。また、野球観戦や遊園地やショッピングに連れて行ってくれたりして、とても楽しい時間を過ごすことができました。ホームステイが終わったあと、1週間キャンプに行ったときは、やはり言語の壁はあったものの、実際にみんなで体を動かしてワークすることで様々な気持ちの共有ができたと思います。伝えたい気持ちが言葉でダイレクトに伝えられないもどかしさはありませんでしたが、それでもジェスチャーや表情さえあれば伝えられることが、とても嬉しかったです。



●広がる自分の世界 (田島千恵子/東京羽田キリスト教会・16歳)

このキャンプを通して私はたくさんの愛を受け取りました。神様と共に働こうとするたくさんの人達と出会えて、こんないい体験が出来て、本当に嬉しかったです。それならば私はどんな愛をあげることができたのだろう……と考えてみました。思いついたのは、ペンキ塗りやクギ打ちを精一杯やったということです。レジデント(修繕する家の住人)の人とても喜んでくれました。人に喜んでもらうのってこんなに嬉しいものだったのかと少し驚き、すごく達成感を感じました。何より私が感じたのは、積極性が身に付いた！ ということです。友達になりたいと思ったら自分から話しかけなければいけない、作業もみんながやっているのを見て自分が出来ることを見つけなければいけない、そのような生活を一週間経験してホームステイ先の家に戻ったら、行く前よりたくさん話せるようになっていました。日本に帰ってからでもそれを感じています。学校で先生が体験を話してみない？ と言って下さったときも、やりたいです！ と自分でも驚くほどすぐに返事をしました。キャンプ中、私が他の人にあげることのできた愛は、私がもらった山ほどの愛にくらべたら本当にちよっぴりだったと思います。だからこそ、学校で話をしたりして少しでも多くの人に、こんな集まりがあって、神様と過ごすこんないい体験が出来る、ということを伝える、そうやって、日本でもLove Out Loudをつづけていきたいと思います。今、私の世界がどんどんひろがっているんだ、そんな風に考えられるようになって、とても幸せです。



2009年度ワークキャンプ募集要項は7ページをご覧ください。

中東地域の学びの機会をいただいて

元難民支援協会職員 沖田由佳子

JELAは奨学金制度を通じて、毎年複数の方々に様々な形で勉学の機会を提供しています。以下にご紹介する沖田さんは現在、オーストラリア国立大学の修士課程で中東地域研究に取り組んでいます。アフガニスタンの復興と世界の安定に役立てたいとの思いからです。



○平和構築の原点としてのアフガニスタン

21世紀に入っても世界各地で紛争が絶えることはありません。アフガニスタンもその一つです。アフガニスタンは20年以上にわたる内戦のすえ、2001年9月11日の同時多発テロを契機に、国際社会の関心・協力を得て、平和への道のりを歩み出しました。ところが、それから7年がたった今、再び国全体で治安が悪化しています。8月には、日本人の支援者の方が殺されるという悲しい事件まで起きてしまいました。多くの異なる民族を抱え、外はイラン・パキスタンなど6カ国に囲まれ、大国・周辺国の介入を受けながら、歴史的に最も多くの難民を出してきたアフガニスタン。この国に平和を定着させられれば、中東や南西アジアだけでなく、世界全体の安定にむけた大きな一歩になると考えています。そのためには何が必要で、何が課題なのかを分析するため、今年2月からオーストラリア国立大学で学んでいます。

○アフガニスタンとの出会いと研究課題

私がアフガニスタンに関わるようになったのは、開発援助機関の職員として、2003年から一年半ほど現地に滞在したのがきっかけです。その頃は、復興支援が本格的に始まり、首都カブールをみる限り、外国からの人・物・資金の流入によって、少しずつ生活が改善し、景気もよくなり、多くの人々が将来への希望を抱いていた時期でした。その一方で、援助の効果は、必ずしも国全体にはいきわたらず、交通の便の悪い地方や、特に治安が回復していない南部への支援はおくれ、支援を受けられる地域と受けられない地域の貧富の差が少しずつ広がっていたのも確かです。また干ばつなどの自然災害もあり、生きていくために、過酷な環境でも育つケシ(麻薬の原料)の栽培・取引を始める地域も拡大してしまいました。こうしたなか、イスラム原理主義のタリバンが再び勢力を盛り返してきています。なぜ、タリバンが勢力を再び拡大しているのか、これまでの国際社会による支援のあり方が適切

だったのか、今後の支援はどうあるべきなのか—ここ数年、このような問いが私の頭から離れませんでした。今回、JELAのご支援をいただけたことで、こうした課題を、体系的に研究し、論文にまとめる機会をいただき、とても嬉しいです。2月からこれまで、中東地域全般の政治、社会、安全保障などの講義を受けながら、ペルシャ語(注)を学んできましたが、いよいよ12月から論文にとりかかる予定です。

○キャンベラで出会ったアフガニスタン人を通じて

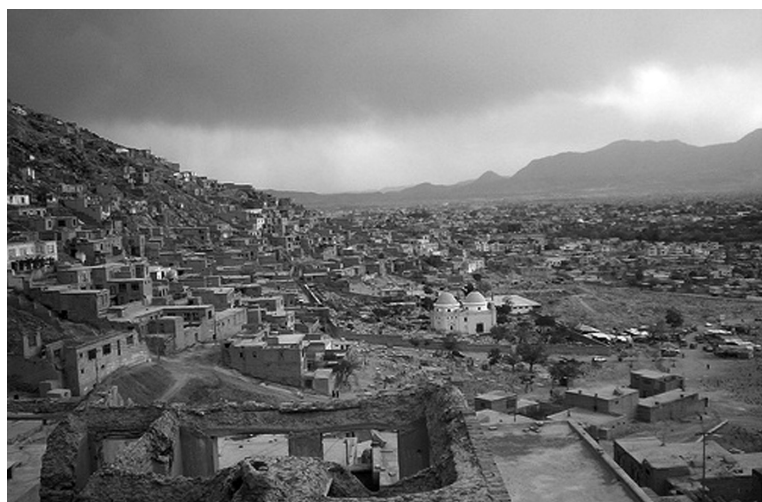
大学のあるキャンベラはオーストラリアの首都ですが、人口35万人の小さな街です。この小さな街にも、多くの移民・難民が暮らし、アフガニスタンからの難民もいます。ところが、ハザラ、タジク、パシュトゥンといった民族ごとにコミュニティをつくり、生活しているため、アフガニスタン人同士でも民族を超えたつながりは全くないとのこと。母国での民族間の不信感や対立を、逃れた先の海外でも引きずり、お互いを知る機会すらないと聞き、とても残念に思いました。内戦を経験した国に平和をもたらすのは簡単なことではありません。いろいろな工夫が必要です。アフガニスタンやそのほかの紛争を抱える国で、これ以上、紛争の被害者や難民を出さないために、現地でやるべき支援もありますが、同時に、オーストラリアや日本など、難民や移民を受け入れている国でできる活動も沢山あります。例えば、JELAや難民支援協会のように、難民が新しい土地で生きていくのに必要な手続き面、生活面での支援もその一つで

す。さらには、もう一歩進めて、母国で対立関係にあった難民たちの間のわだかまりをなくし、たとえトラブルが起きても話し合いによって解決し、共生することを学べるプログラムを難民受入れ国で導入できないかと考えています。アフガニスタンがそうであるように、内戦を脱し、復興の途上にある国が、新しい国のあり方をめぐって、人々が対立し、再び内戦状態に戻ってしまうことは少なくありません。それを避けるためにも、今、海外で暮らす難民達の中に、平和の種をまき、そして将来、紛争が終わり、彼らが母国に戻るとき、人々が互いに助け合いながら国を再建していく道筋や雰囲気づくりを担えるよう応援する、そんなことができないかと、キャンベラでのアフガニスタン人との出会いを通じて感じています。

(注)ペルシャ語の方言、ダリ語がアフガニスタンの公用語の一つとなっています。



指導教官(アミン・サイカル教授)と



アフガニスタンの首都カブール



アジア学院(ARI)研修生交流会報告

JELA職員 嶋海 亮

インドネシアの農村風景

前回第16号のJELAニュースにて関連記事を掲載いたしましたが、毎年JELAでは学校法人アジア学院(ARI)への支援として、ルーテル教会員の研修生1~2名分の1年間の学費に対し奨学金を支給しています。

また、日本福音ルーテル教会東教区の諸教会にお呼びかけをし、JELAの支援対象(アメリカ福音ルーテル教会支援の研修生も含む)のARI研修生による研修報告兼交流会の各教会での開催をお勧めしています。今年は、保谷教会・聖パウロ教会・三鷹教会・本郷教会の計4教会が開催をお引き受けくださいました。

9月28日に開催された保谷教会での研修報告会では、インドネシアからの研修生であるジュンピター・ハシホーラン・パッパハンさん(27歳)とガニ・シラバンさん(32歳)のお二人からいろいろと興味深いお話を伺いました。過去には研修生の中に牧師もいたため、礼拝における説教もお願いしたことがあります。今回はお二人とも信徒であるため、ジュンピターさんには礼拝の中での証言を、ガニさんには賛美をしていただき、また礼拝後の交流会ではガニさんから流暢な日本語による研修報告をしていただきました。

インドネシアの農家は、外国製の高価な農薬及び化学肥料等の使用に依存し、高コストな生産を行っています。一方で、苦勞して生産した農作物は安く買い叩かれ、生産コストに見合った収入を農家が見ることができないという現実があります。現地の農

業指導者として、ジュンピターさんとガニさんは上記の問題を抱えた多くの農家の収益改善と地元周辺の環境問題に取り組んできました。お二人は現在ARIにて、農薬・化学肥料を使用しない日本の伝統的な農業及びその指導法について9ヶ月間の予定で学習しています。帰国後にARIで修得した自然・有機農業の技術を用い、地元の農家を支援していくことへの使命をお二人とも熱く語られ、その情熱は出席者に大きな感動を与えました。

途上国における自然・有機農業の推進の前には、化学メーカーと結託した地元政府の妨害などが多々あるようです。あらゆる困難に屈することなく、ジュンピターさんとガニさんの努力が実を結ぶことを祈らずにはいられません。

環境汚染・所得格差・食糧難などが世界規模で、しかも驚くべきスピードで進行している昨今、これらの問題は私たち日本人にとっても身近な現実となりつつあります。これらの問題に真っ向から立ち向かい、解決する努力をしているルーテル教会の同胞のお話を、一人でも多くの教会員の皆さまにお聞き願いたく存じます。

旅費等の経費を全額JELAが負担している都合上、残念ながら現在のところは当研修報告兼交流会の依頼は東教区の諸教会に限らせていただいております。対象教会の牧師宛に毎年開催依頼状を送付させていただいております。是非多くのご応募をお待ち申し上げております。



左後列から:ジュンピターさん、ガニさん、平岡牧師、ARI理事遠藤氏



交流会風景 スピーチをするガニさん

2009年 グループ・ワークキャンプ 参加者募集!!

以下の要領で参加者を募集します。募集定員は10名、申込期限は2009年1月末日(必着)です。

- ◆派遣期間:2009年7月23日(木)~8月6日(木)
- ◆内容:サウスカロライナ州でのホームステイとノースカロライナ州でのワークキャンプ(家屋修繕、聖書の学び等参加者の信仰的・人間的成長を促すプログラム)に参加。
- ◆参加費用:20万円(パスポート取得費用及び海外旅行保険費用は自己負担)。
- ◆問合せ・申込用紙請求先:
JELC+JELAボランティア派遣委員会
住所:162-0842 新宿区市谷砂土原町1-1 JELC宣教室気付
電話:03-3260-1908
ファックス: 03-3260-1948
E-mail: workcamp@jelc.or.jp
- ◆選抜方法:2009年1月末日までに到着した申込用紙の中から派遣者を決定し、2月中に派遣の可否を申込者に連絡します。

<注意事項>

- !2009年 8月1日現在の年齢が14歳~20歳の方が応募できます。
- "ルーテル教会員でなくても、クリスチャンでなくても参加できますが、聖書を学び話し合う時間が毎日あり、すべての行事に積極的に加わることが求められます。
- #牧師等数 名の日本人成人が同行し、霊的・言語的側面から日本人参加者を支えます。
- \$米 国の主催団体との手続きに時間がかかるため、申込期限が1月末日になっています。
- %派遣確定通知受 領から出発までの間にキャンセルされる場合は、その時点までに発生した費用をいただくことがあります。
- & 派遣確定者にはパスポートが必要となりますので、まだお持ちでない方、更新が必要な方は申請の手続きを行う必要があります。
- ' 派遣確定者には、日本福音ルーテル教会が毎年3月下旬に実施している青少年向けキャンプ「春キャン」への参加をお勧めします。教会になじみのない方は、クリスチャンのキャンプを体験しておくことが望ましく、米国に行く仲間どうか出発前に親しくなる機会でもあります。「春キャン」の詳細情報は、米国派遣決定通知送付の際にお知らせします。

一日神学校へ初のブース出展！

9月23日(祝)にルーテル学院大学・神学校にて恒例の「一日神学校」が開催され、JELAは初めてブース参加をしました。まだ蒸し暑さが残る中、参加教会のブースと並び、ブラジル関連の友人の協力を得て、ブラジルコーヒーやブラジルのケーキ(ケイジャ

ジーニャ)を販売し、また、キルトの展示やハープの生演奏と、盛りだくさんな賑やかなブースとなりました。様々な形で少しでも多くの方々にJELAを知っていただけたらと、意欲に燃えた初ブース参加となりました。



市ヶ谷教会で「世界の子ども支援チャリティ・コンサート」開催。

ルーテル市ヶ谷教会では、昨年に引き続き今年もJELAのアジア・ブラジル子ども支援のためのチャリティ・コンサート「LOVE6」を、去る8月24日、ルーテル市ヶ谷センターで開催いたしました。出演は、日本屈指のボイストレーナー安ますみさんプロデュースで、ミュージカル「ミス・サイゴン」出演中の井上芳雄さんをはじめ、ミュージカル、ポップス、ジャズ、狂言など各界で活躍する井出麻理子、宮原永海、K、西任白鶴、CAYO、善竹富太郎、安田岳弘、藤山高浩、坂井和也、山本野乃香さんなどのボーカルに、バックは大塚理恵(ピアノ)、木村雅彦(シンセサイザー)、根岸和寿(ベース)、佐々木敬史(ドラム)、鶴見恭男(ギター)さんの

ベテランプレイヤー。それぞれのファンの方々も集まって、立ち見の出る盛況ぶりでした。収益金はそのままJELAに寄付していただき、世界の子ども支援のために用いられることになりました。ご協力を心より感謝いたします。



(2008年7月1日～9月30日)

● 各プログラム支援献金

石田浩子/石原勇/石森京子/伊東節子/井上祐子/江澤妙子/大塚真佐子/大中まり/岡部瑞子/岡本弘志/加藤俊輔/上窪松子/紙谷守/京谷信代/釧路教会/児島和子/小松かつみ/小宮俊作・武子/近藤美知子/桜井永之/周田裕芳/白髭市十郎/鈴木辰典/鈴木陽子/関口佳子/関本憲弘/高田紀子/高橋寿子/高柳美奈子/竹渕三和子/玉名教会/堤重敏/東郷優子/鳥飼勝隆・豊子/中野美香/芳賀明子/芳賀直哉・美江/ハルポーセン美智代/早瀬康平/平島徳蔵/平田幸子/藤井浩/紅林真由美/ベンケ・パトリック/細山千恵子/松浦雪子/松嶋俊介/南節子/名東教会/八坂由貴子/山県順子/山田薫/山本一男/山本了/若原奇美子/和田英男・智恵子/渡辺高伸・映子/渡辺伸宏/ 他匿名複数名

● 賛助会費

相川博/阿波田絹子/上田真司/兼岩恵美子/神谷智子/小石川教会/島宗正見/竹渕三和子/龍野摩耶子/田中美紗子/鳥飼勝隆・豊子/古川いつ子/森涼子/和田美和子 他匿名複数名

以上、敬称略。ご協力ありがとうございます。

なお、匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

「結婚できない男」というドラマがありました。偏屈なため異性に嫌われる男を、上質のウィットとユーモアで描いた作品です。最終回で、主人公を毛嫌いしていたはずの女性がかんことを口にします。「私たち、ずっとドッジボールをしてきたけど、本当はあなたとキャッチボールがしたいの!」。告白のセリフも気がきいていますね。さて、ジェラニュースは皆様とキャッチボールができているでしょうか。気軽にボール(つまり記事へのご意見・ご感想)をこちらに投げただけると、誌面を作成して返球する際に、少しは受け取りやすいボールが投げられるように思います。ドッジボールになっていなければ幸いです。(M)

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
日本福音ルーテル社団